

〔翻 訳〕

ババッド・タナ・ジャウイ (7)

第5部 ババッド・マタラム 1

深 見 純 生 訳

訳 者 序 言

今回からババッド・マタラムに入る。全37章（38～75章）と長いので、4回に分けることとし、今回は38～48章である。セナパティがいよいよ東部ジャワの征服に乗り出してから、その孫のスルタン・アグンが即位するまでである。セナパティの征服事業は簡単には進まず、一族の叛乱にも悩まされる。セナパティの死後はその子クラブヤックが継ぐが（45章）、その治世は一族の叛乱以外に多くは語られない。

なお、ラスはセナパティの在位年を c.1588-1601 とする〔Ras 1987b: LXIV〕。本文の45章冒頭では在位3年にして死去したとされるが、正しくは13年なのであろう。バライプスタカ版のこの部分では在位年数を確認できなかった。クラブヤックの在位年は同じくラスによれば1601-1613である。

キーワード：ババッド・タナ・ジャウイ，マタラム，セナパティ，
クラブヤック，スルタン・アグン

解 題

3. バライプスタカ版

(4) 底本 前号の解題で紹介したように、バライプスタカ版の序文は、底本を次のように説明している。スラカルタ王国のスフナン・バクブウォノ7世（位1830～1858）がオランダ政府に寄贈し、レイデン大学に貸し出されたものの複写であり、ジョクジャカルタ在住のピジョー博士の図書室にあった。ところが、この説明は後のピジョー自身の解説と大きく食い違っている。

ピジョー（Th. G. Th. Pigeaud, 1899～1988）は周知のようにジャワ語とジャワ文献学の大家である。彼は1924年から1948年までジャワ（おもにスラカルタとジョクジャカルタ）に言語官などとして勤務していたので、バライプスタカ版に関わった可能性はある。しかし、彼が実際バライプスタカ版に関わったかどうか、筆者には不明である。

ピジョーは1948年オランダに帰国した後、KITLV（Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde 王立言語地理民族学研究所）において主にジャワ文献学の調査研究に従事した。彼の代表作の一つ『ジャワの文献』3巻は、レイデン大学はじめオランダの諸機関が所蔵するジャワの手写本の詳細な目録および解題であり、ジャワ（と周辺地域）の文学と文献の歴史に関する基本文献である。その中で当然バライプスタカ版のもとになった写本 LOr 1786 も扱われていて、次のように説明されている〔Pigeaud 1967 2: 25〕。

これは大ババッドと通称されるものであり、ウィンテルの監督下にスラカルタで書かれたジャワ文字の写本であって、18巻からなる。ウィンテルがデルフトに提供し、1864年にレイデン大学に移管され、レイデン大学では LOr 1786 という整理番号が与えられた。

LOr はレイデン大学図書館東洋手写本 (Leiden University Library Oriental manuscript) のことであり、LOr 1786 はレイデン大学のいわゆるデルフト・コレクションの劈頭を飾るものである。

ところが、ピジョーによれば、バライプスタカ版の底本はこの大ババッド自体ではなく、レイデンにおいてスギアルト J. Soegiarto によってローマ字に転写されたコピーである。このローマ字版のコピーはレイデン大学では BCB portfolio 30-34 という整理記号番号が与えられている。手書きではなくタイプ打ちである [cf. Wieringa 1999: 245]。スギアルトは、ピジョーによれば、1930年からレイデン大学のジャワ語の教授ベルフ C. C. Berg, ドレウェス G. W. J. Drewes, ウーレンベック E. M. Uhlenbeck の助手を務め、多数のジャワ語写本のローマ字への転写とオランダ語の梗概を作成している [Pigeaud 1967 2: 11]。

すなわち、バライプスタカ版の序文には次の2点で留保が必要である。大ババッドにバクブウォノ7世は深い関わりがあり——まさにこの王のために作成された——、この写本がデルフトに提供された時期はその在位年代とはほぼ重なるとしても、この王はレイデン大学の写本 LOr 1786 に直接の関わりはない。第二に、底本は大ババッドのローマ字化された写本であり、バライプスタカはこれを再度ジャワ文字に転写して刊行したことになる。

このジャワ文字への再転写がレイデンで行われたとは考えにくい。それくらいなら、レイデンでジャワ文字版 (LOr1786) から直接複写するのが合理的である。バライプスタカ版の序文がいうように、底本がジョクジャカルタのピジョー博士の図書室にあったとすれば、それはスギアルト版の複写だったことになる。

かくして、原本からバライプスタカ版までの間に次の過程があったことになる。①原本⇒②ウインテル監督下の写本 (LOr1786)⇒③スギアルト

のローマ字版 (BCB portfolio 30-34)⇒④スギアルト版の複写⇒⑤バライプスタカ版。

スギアルト版の複写が作成された経緯（もともとカーボンコピーが作られたのか、後日複写されたのかなど）は筆者には不明である。またバライプスタカが依拠したスギアルト版複写の現在の所在も筆者には不明である。なお、ピジョーによれば、スギアルト版は全3754頁におよぶ浩瀚なもので、5つの書類ケース (BCB portfolio 30-34) に納められていたが、その書類ケース30番は所在不明 (missing) である [Pigeaud 1967 2: 166, 795]。

(5) 章区分 すでに述べたとおり、本書にはもともと章立ては存在しない。バライプスタカが編集に際して全体を124章に区分し、各々に題目をつけたのである。各分冊の最後の頁の目次に、章の番号と題目そして頁が示される。ただし、その編集者が誰なのか、またどのような原則で区分し題目をつけたのか不明である。

この翻訳の底本であるメインスマ版の第5版では、編者のラスが全124章の題目と大ババッド (LOr 1786) における詩章詩節の区切り、各詩章の韻律の名前、メインスマ版の頁を一覧にしている [Ras 1987b: LV-LXIII]。そして本文の左右の余白に詩章詩節の番号が記されていて、これを手がかりに章区分を確認しながら読むことができる。

章立ては読者にとってたいへん便利である。不可欠といってもよいだろう。しかし、各章の長さが区々である他、区切り方や題目のつけ方について、問題を感じないわけではない。一例を前号に求めるなら、第35章はかなり長いだけでなく、本筋から外れたラデン・パペランの物語を長々と語った後に、パペランの父の奪還などを経て、本書のクライマックスの一つというべきプランバナンの戦いに至る。戦いの場面は章をまたいで第36章の第一段落まで続いている。またプランバナンの戦いの語は章の題目に現れない。

ババッド・タナ・ジャウイ (7)

第5部 ババッド・マタラム 1

目次

- 38. セナパティの息子ラデン・ランガの超能力
- 39. セナパティがスナン・ギリに自分をジャワの王と宣言するよう求める
- 40. セナパティが東部のブパティたちと戦う
- 41. セナパティがマディウンとパスルハンを征服する
- 42. クディリのセナパティが戦わずしてマタラムの偉人に降伏する
- 43. マタラムが東部ジャワ勢に攻められる
- 44. パティ国守がマタラム侯に敵対する
- 45. セナパティが死に太子が継ぐ
- 46. ドゥマック国守がマタラムに背く
- 47. パナラガ国守に任じられたジャヤラガ公がマタラムに叛く
- 48. クラブヤックが死に、マルタプラ公が継ぎ、ランサン公に譲位

38. セナパティの息子ラデン・ランガの超能力

さて、このラデン・ランガであるが、並外れて力が強く、頑健、不屈であった。性格は短気で、かっとなるとすぐに手が出るのだった。頭を一撃されて死ぬ者がしょっちゅうだった。バントウンからセナパティの屈強さに挑戦しようと一人の男がやってきて、ランガと力強さを競うこととなった。バントウンの男は負けて、横撃されたため死んでしまった。父上の耳に達するとランガは叱られ、父の足の親指を折るよう命じられた。パヌンバハンが痛みを感じた途端、ランガは吹っ飛ばされた。面目を失って恥ずかしくなったランガは飛び出してしまった。門を通る気がせず壁にぶつかっ

た。壁には人間一人分の穴が開いた。ランガはパティに逃げていこうとした。父は後を追わせて戻るよう命じたが、後を追った者はランガの足の間に挟まれて死んでしまった。ランガはパティに着くと叔父を訪ねていった。パティの国守はちょうど外の接客所にいた。その前に一つの大きな石があった。国守は甥がきたのを見ると、すぐに手を振って合図した。ランガはその石を避けることなく直進した。石は砕かれてしまい、パティの人々はみなびっくりした。

パティに長く滞在した後、ランガはマタラムに戻っていった。その道中、タマリンドの樹にもたれる苦行者を見た。苦行者はランガに掴まれると体が裂けて死んでしまった。こうしてマタラムに着いた。パヌンバハンは息子がきたのを見ると呼びつけて、カスクテン〔靈力〕やその他の能力を高めるために、キ・ジュールマルタニのもとで学ぶようお命じになった。ランガは「御意のままに」と答えて、キヤイ・ジュール爺の館に向かった。ランガは独りごちた。「もうおれに敵う者はいない。にもかかわらずまだジュール爺のもとで学ぶよう命じられた。いったい何を学ぶのか」。祖父の家に着くと、キヤイ・ジュールはちょうど小さいモスクで礼拝中だった。そこでランガはモスクの階段に座った。それは平らな石でできていたが、ランガの指先で突つかれると柔らかい土であるかのようにへこんだ。石には指でいじくられて窪みができた。午後の礼拝を終えてモスクから出てきたキヤイ・ジュールは、孫が石をほじくっているのを見て驚いた。そして語りかけた。「ランガよ、お前が突ついているそれは硬くないのか」。その瞬間石はすっかり硬くなった。突ついたが、何ともならなかった。ランガは気づいた。「ジュール爺のもとで学べと命じられた父上は正しかった。このような老人はカスクテンやその他の秘術において若者に劣るものではない」。こうしてランガは祖父に教えを乞うた。キヤイ・ジュールは孫にたくさんの教えを授けた。その後ランガは家に帰った。

長い時間が流れてからランガは、パタラン Patalan にとてつもなく凶暴な大蛇がいると聞いた。しばしば通行人を飲み込むという。ランガがそこに行ってみると、蛇はたちまちやってきて、噛みつき巻きついた。ランガはじっと動かなかった。噛みつかれても何ともなく、巻きつかれても動じなかった。そして蛇はぶつ切りにされて死に、ランガは家に戻った。家に着くと病気になりついに死んでしまった。

39. セナパティがスナン・ギリに自分をジャワの王と宣言する よう求める

さて、バヌンバハン・セナパティはマタラムで良い生活を送り、すでに9人の子があった。長子はすでに死去したラデン・ランガである。その弟はパンゲラン・プグル Puger といった。3番目はパンゲラン・プルバヤ Purbaya, 4番目はパンゲラン・ジャヤラガ Jaya-Raga, 5番目はパンゲラン・ジュミナ Juminah であった。6番目はバヌンバハン・クラブヤック Krapyak であり、その幼名はラデン・ジョラン Jolang といった。これが父の王位を継ぐことになっていた。7番目はパンゲラン・プリングアラヤ Pringga-Laya といった。8番目は娘で、ラデン・ドゥマン・タンパ・ナンキル Tanpa-Nangkil と結婚していた。9番目も娘で、パンゲラン・トゥバサナ Tepa-Sana と結婚していた。キヤイ・ジュルマルタニは位が上がってディパティ・マンダラカ Manda-Raka と名乗った。

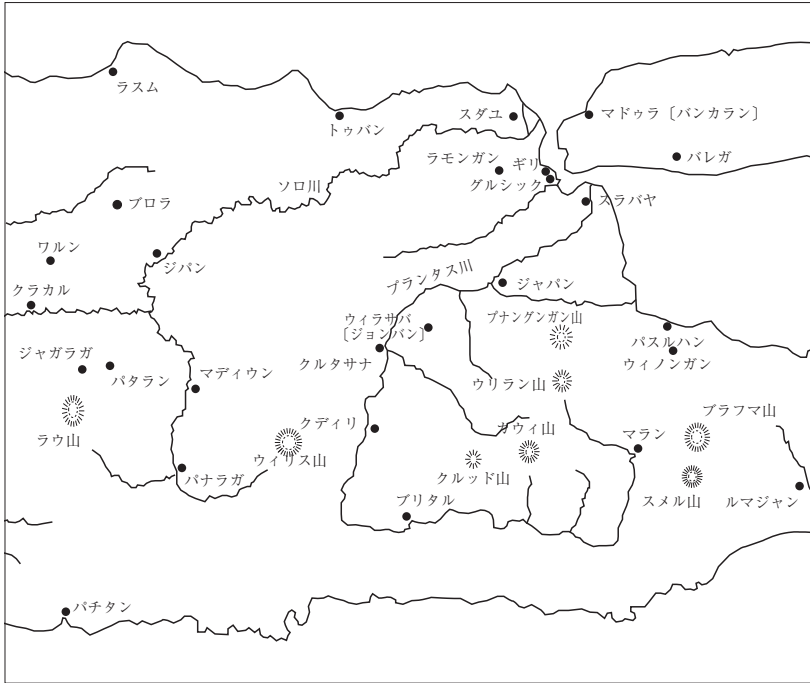
パジャンのパンゲラン・ブナワはスルタンに即位して1年で死んだ。そこでセナパティの弟パンゲラン・ガガック・バニン Gagak-Baning が跡を継ぎ、パジャンの国守に任命された。パジャンの人々はみなおとなしく従い、その統治は順調だった。しかし彼は元の王宮に住もうとせず、その東に居を移した。町の城壁は拡大され、そのためアラビアからきた篤信者の墓が城壁内に位置することになり、その御利益が現れた。パジャンの町は

今では四角くなった。ガガック・バニンはその後間もなく死去し、マタラムに葬られた。息子のパンゲラン・パジャンが跡を継いだ。

さて、セナパティは手紙をもたせて使者をギリに派遣した。かつてパジャンのスルタンがギリを訪れた時になされたスナン・ギリの予言を確認しなかったのである。使者は出発し、スナン・ギリはちょうど臣民の拝謁を受けておられた。使者は手紙を差し出し、スナン・ギリは渡された手紙をお読みになると微笑んで申された。「使者よ、セナパティに伝えよ、我が予言を確信したければ東部へ進撃してみよと。我が予言は、マタラムの王がやがてジャワ全土の人々を支配するというアラーの思し召しによる運命である。ここギリでさえやがてマタラムに服従する。アラーの思し召しはすでに変えようがなく、主が僕になり僕が主になる逆の世界ができるのだから。その証拠はすでにパジャンにおいてまたマタラムにおいて見られる」。使者は別れを述べて去った。

マタラムに戻った使者は一部始終を報告した。セナパティは叔父マンダラカ公に言った。「叔父上、私はただちに東部へ進撃いたしたい。ムカラム月に出陣します。かつてパジャンのスルタンがまさしくムカラム月にギリを訪ねられた例に倣うのです。ついては叔父上は、我が支配下にあるパティ、ドゥマック、グロボガンの国守たちがみな参陣するよう指揮をお取りください。やがて私が出陣する際にパジャンに勢ぞろいするように」。マンダラカ公は「心えてござる」と申された。ムカラム月になると、パヌンバハン軍は率いて出発なさった。支配下にある諸国の者たちもみな、まだ服従していない東部の諸国を征服するためにともに進んだ。一行はジャバンを目指した。

東部ではスラバヤのパンゲランがプパティたちの指揮を取った。マタラムのセナパティが東部の国々をすべて服従させるつもりであると聞いたスラバヤ公は、急いでトゥバン、スダユ、ラモンガン Lamongan、グルシッ



地図＝東部ジャワ

ク、ルマジヤン Lumajang, クルタサナ Kerta-Sana, マラン Malang, パスルハン, クディリ Kedhiri, ウィラサバ, ブリタル Blitar, プリンガバヤ Pringga-Baya, プラグナン Pragunan, ラスム, マドゥラ, スムヌップ Sumenep, パカチャンガン Pakacangan のブパティたちに使者を派遣して呼びかけた¹⁾。みなセナパティと戦うため軍勢を率いてジャパンに集まった。セナパティとその軍もジャパンに着き、両軍は対峙した。

その時、スナン・ギリの使者が手紙をもって現れた。使者はジャパンに着くと、自らの仮寓を設営した。そしてセナパティ侯とスラバヤ公およびすべてのブパティたちに参集するよう求めた。みな使者の仮寓に集まり、順序正しく座を占めた。使者は言った。「お歴々のプリヤイのみなさま、

私はスナン・ギリ上人様より手紙を伝えるために遣わされました。読み上げますので、よくお聞きください」。このような内容であった。「余スナン・ギリより、我が息子マタラムのセナパティ宛および我が息子スラバヤ公宛の手紙。手紙の趣旨はこうである。汝ら相戦わんとするなら余はそれを許さぬ。多くの死者がでて小さき者が倒れるからである。いま汝ら2人は中身か入れ物か選択せよ。汝らが自らの意志により中身か入れ物か選んだ後は仲直りし、そしてアラーに感謝せよ。ただちにそれぞれの国に戻るのだ。そして将来きっと、アラーの思し召しありて、汝らあるいは貴となりあるいは賤となるも、運命として受け入れよ。以上」

そこでセナパティはスラバヤ公に尋ねた。「スラバヤの弟よ、わしとそなたに中身か入れ物か選択せよ命じられる、このスナン・ギリ様のご指示をいかが思うか。そなたがどちらか選ぶがよい。わしは従うだけだ」。スラバヤ公は「セナパティ兄よ、わしは中身を選ぼう。そなたは入れ物だ」と応じた。セナパティ侯も入れ物を受け取ることに満足した。選択が終わるとそれぞれ自国に戻っていった。ギリの使者も戻り、主人に報告した。報告を受けたスナン・ギリは申された。「よく聞きなさい。セナパティが入れ物を取ったのは正しい。これもアラーの思し召しによる宿命である。入れ物とは国であり、中身とは人である。人々が土地の所有者に従わなかったら、きっと追い出されるのだ」

さて、スラバヤ公はプロラの国のワルン Warung にブパティを任命し派遣した。これを聞いたセナパティ侯は、このブパティを途中で服従させようとした。従わないなら、ワルンの土地に足を踏み入れるのを許さない。その土地はセナパティのものなのだから。ブパティはマタラムに服従した。まわりの地域もみなマタラムに服従した。抵抗する者は武力で征服された。

40. セナパティが東部のブパティたちと戦う

その時マディウンのパヌンバハンは、まだマタラムに服従していない東部のブパティたちの列に加わった。マタラムを征服しようというのだった。というのも、たとえるならセナパティはまだ小さな火のようなものだが、燎原の火となる前に水をかけてしまうのがよい。ブパティたちの相談がまとまりよく武装した軍勢を引き連れてマディウンに集まった。並外れた大軍になった。

セナパティ侯はすでに間諜から、マディウン侯が多数のブパティたちとともにマタラムを征服しようとしているとの通報をえた。セナパティ侯はただちに軍の動員を下命するとともに、支配下の諸国にも参陣を命じた。みなが揃うとちょうどムカラム月であり、セナパティ侯は全軍を出陣させた。マンダラカ公も随陣した。マディウンの町の西に到着すると、マディウン川の西のカリ・ダドゥン Kali-Dadhung 村に布陣し、川をはさんで敵の軍勢と対峙した。

セナパティ侯は、敵がたいへんな大軍なのに較べて自軍がわずかばかりなのを見て、マンダラカ公とともに策略を練った。セナパティはとびつきり美しい侍女のアディサラ Adi-Sara に命じた。「アディサラよ、マディウンの町に行け、わしのこの手紙をマディウン侯に届けるのだ。手紙の中身は、わしが屈伏するふりをするものだ。奴が警戒心を解き、うまくすれば軍を解散させるようにだ。この手紙を渡すだけでなく、奴にわしへの好意を起こさせるよう努めよ。美しい着物を着て十分飾りたて、そして輿に乗って行け。輿を担ぐのと、お前の地位の旗印を持つのは、わしのジャヤタカ Jayataka 武士40人だ。もしマディウンの一族の者たちが邪魔をしても、度が過ぎない限り好きにさせよ」

アディサラは「御意のままに」と答え、奇麗な着物を着てさらに身を飾

りたてた。並外れて美しく、見る者すべてを魅了した。こうして輿に乗り、天蓋を差しかけられ、王女であるかのような旗印を掲げて出発した。行列はマディウンの大軍のただ中を進んだ。護衛されていくのが女性のプリヤイであるとわかったので、陣中の誰一人として疑念をもたなかった。一行を見て「こちらはどなた様でしょう」と尋ねるのだった。マタラムの者たちは「こなたはマタラムの我らが王様が降伏を申し上げるのだ」と答えた。これを聞いた軍勢は戦争に出なくてよいと思ってとても喜んだ。

さて、マディウン侯はドゥマックのスルタンの息子であり、亡きバジャンのスルタンによりブパティに任命されたのだった。娘と息子1人ずつの子がいた。上が娘で並外れて美しくすでに成人していて、名をルトナ・ジュミラ retna Jumilah といった。弟はマス・ロンタン Lontang といった。ジュミラ姫は結婚を勧められても、断り続けていた。嫁ぎ先の両親が嫁に拝礼するなら結婚しましょうと答え、そして剃刀をもつことを条件とした。それで切られてもなんともないような男性がいたら、ジュミラ姫は喜んで妻になるという。そうでなければ、けっして結婚したくないというのだった。

41. セナパティがマディウンとパスルハンを征服する

その時マディウン侯は子供たちや一族とともに王宮の中にいた。アディサラがきたのを見て驚いた。不意に入ってきて足許に屈み込んだのだった。侯は落ち着いて尋ねた。「お前はどこから来て、何という名か」。アディサラは跪拝して答えた。「私めはあなた様の僕、マタラムのセナパティの使いでございます。名をアディサラと申します。あなた様に降伏を申し出る手紙をお届けするよう遣わされました」。侯は手紙を受け取った。そこには、セナパティは降伏して、僕となり、マタラムの国を差し出すつもりであると書いてあった。侯は読み終わると言った。「アディサラよ、我が子なるセナパティに伝えよ、余自身はお前と戦うつもりはないと。多くのブ

パティどもがセナパティと戦おうとしておるのだ。余と余の軍はこれに同調しない。お前の主人はこのようにすでに余に降伏しようとしておるのだから、多く来ておるブパティたちを解散させよう。セナパティと戦いたい者がいたとしても、余の国の中では集まらせない」

侯は近習の1人に指示して、ブパティたちに軍を解くよう命じ、そしてセナパティがすでに降伏したことを知らせた。ブパティたちとその軍のある者はそこを去り、ある者はまだそこに残った。アディサラはというと、侯の言葉におおいに喜び申し上げた。「ご主人様、あなた様の僕セナパティは、あなた様がおみ足を洗われた水をいただきたいと願っております。祝福がもたらされ、無敵さが与えられるようにそれを飲み、それで沐浴いたしたいと」。アディサラは、侯がセナパティに好意を抱くよう様々に言葉を尽くした。侯は実際足に水をかけ、アディサラはそれを銀の鉢に受けた。その際に侯は言った。「アディサラよ、余はお前の主を余の養子として受け入れ、余の2人の子、姫と若の兄弟にしよう」。アディサラはたいそう感謝の言葉を申し上げ、そして宿営地に戻る暇を乞うた。

セナパティは、アディサラの華美な飾りがそのまま保たれているのを見ておおいに喜び、首尾を尋ねた。アディサラは一部始終を語り、そして、マディウン侯には結婚したがない姫がいることを話した。姫は、義父母が嫁に跪拝するのでなければ結婚せず、また剃刀の条件をもつことを。セナパティはアディサラの報告を聞くとおおいに喜び、アディサラの働きをねぎらった。

その日マンガラカ公がセナパティに申された。「おい、お前は王になりジャワ全土を支配したいのだから、アディラングにおられるスナン・カリジャガ様にお目通りして、キヤイ・グンディル別名キヤイ・アンタクスマという上衣を懇望してみるとよい。キヤイ・グンディルの話しはこういうものだ。ワリたちがドゥマックにモスクをお建てになり、その中に座って

ジクルをしておられた。その時包みが上から落ちてきた。たまたまスナン・カリジャガが貰われることになった。よく見ると包みは山羊皮であり、預言者ムハマッド様の礼拝用敷物と預言者様が用いられた肩掛け布からなっていた。スナン・カリジャガはその皮で上衣をお作りになった。なぜ上衣かとスナン・ボナンがお尋ねになると、スナン・カリジャガは『上衣を作った理由は、それがジャワを支配する王により着用されるであろうからです』とお答えになった。だから、セナパティよ、お前があの上衣を懇望して与えられたなら、それはお前が本当にマタラムにおいて王となり、子孫に伝えられることの証となる。与えられなかったなら、お前は本当に王になることはできない」

叔父の言葉を聞いておおいに喜んだセナパティは数人の騎馬武者を従えただけで出発した。軍のことはマンダラカ公に任された。アディラングに着くとすぐに聖パンディタ〔賢人〕にお会いした。セナパティは戦士たちの秘薬、弾丸に当ることがなく堅強でいられる魔法の薬を懇望した。聖パンディタは、キヤイ・グンディルあるいはアンタクスマという名の上衣をお与えになった。こうしてセナパティは軍のもとに帰っていった。

その翌日セナパティは、マディウン軍の一部が撤退したことがわかった。残っている部隊もまったく無警戒だった。そこでセナパティはマディウン軍を攻撃するため、軍を3分するよう命じた。日の出の時には川の東岸に達している手筈だった。準備が整うと、大軍が夜のうちに川を東へと渡った。日の出の時にはみな東に渡り終えていて、一斉に攻めかかった。関の声が轟きわたり、戦いの銅鑼が響き、家々に火が放たれた。マディウンに滞陣していた軍勢はびっくりし、慌てて支度し、こうして激戦が始まり、大勢が死んだ。セナパティはプスパ・クンチャナ Puspa-Kencana という名の濃い鹿子色の馬に乗り、上衣のアンタクスマを着用して槍で奮戦した。東軍は大勢が死んだが、西軍は死者が少なかった。東軍は大崩れとなった。

リンシル・ウェタン lingsir-wetan の刻〔朝9時頃〕になると、セナパティの馬は傷がもとで死んだが、セナパティはそのまま戦い続けた。リンシル・キレン lingsir-kilen の刻〔午後3時前後〕になってマンダラカ公が気づいて尋ねた。「セナパティ、お前の馬はもう死んでおるが、お前はまだそれに乗っておるぞ」。こうして馬はようやく倒れた。セナパティは飛び下りて答えた。「叔父上、要らざる口出しでござる。この馬は今朝からもう死んでいた。そして今ついに崩れ落ちてしまった」。こうしてセナパティは誓いを立てた。「わが子々孫々まで濃い鹿子色の馬に乗ってはならない。今のわしのようにしくじるだろうから」。つづいてセナパティはマディウンのクラトンへと進んだ。

マディウン侯は部隊から、セナパティが攻撃に出たとの知らせを受けた。降伏を申し出たあの手紙を差し出したのはまやかしにすぎなかったのだ。東部のブパティたちの軍やマディウン軍ではすでに大勢が死に、生き残った者はみな逃げ去り、クラトン内の人々は取り残された。クラトンの外はマタラム軍により略奪され尽くした。侯はこのことを聞くと深く後悔した。「これがセナパティの思惑だとは考えもしなかった。奴は毒酒と言うべきだ。酒のように見えてじつは毒だった」

そして侯は妃と王子に落ちのびるよう命じた。一方、ジュミラ姫にはこう指示した。「我が姫よ、お前のクラトンを守るために後に残れ。戦に敗れた者は全財産を奪われ娘たちが連れ去られるのが習わしだから。加えて、お前にはわからなかったかもしれないが、セナパティがわしの国をこんなに激しく攻めたのは、お前を奪いたいからだ」。ジュミラ姫は父の指示を聞くと泣きだし、意識を失って崩れ落ちた。母も侍女たちも泣きだした。侯は姫の乳母と侍女たちに、また後に残る女官たちに申し渡した。「お前たちは姫に仕え続けよ、お前たちが殺されることはない。そして姫が正気に戻ったら、我が遺品のクリスを与えるのじゃ。名をグマラン Gumarang

という」。乳母がクリスを受け取ると侯は出ていき、妃と王子も行を共にした。一行はウィラサバ Wira-Saba を目指して東へ進んだ。

残された姫はやがて気絶から覚めると乳母からクリスを受けとった。姫はこのクリスでセナパティと刺し違えて死のうと決意した。そして男装になり、クリスを帯びるとともにピストルを帯に差し、槍を横に置いて座敷に座った。セナパティは、マディウン侯はすでに落ちていき、姫がクラトンに残されているとの知らせを聞くと、おおいに喜んで急いでクラトンに入った。内廷の前庭に入ると姫にピストルで撃たれ、ついで槍を投げられた。セナパティの胸に当たったが、何ともなく、悠然と近づいていった。姫は素早く聖クリスを抜いて「このわらわのクリスに刺されて、お前が何ともなかったなら、お前の不死身が明らかになる」と言った。姫が聖クリスを抜いたのを見るとセナパティははっと息をのんだ。内廷の扉の前で立ち止まると、姫に好意をもってもらおうとなだめるように話しかけた。姫が自分を受けいれてくれるようにと言葉を尽くした。これを聞いているうちに姫は怒りが消え、心が落ち着いてきた。力が抜けてしまって座り込み、頭を垂れると我知らずクリスを放してしまった。セナパティは素早く飛びついてクリスを手に取ると鞘にしまって帯に差した。姫のそばに座って優しく語りかけた。姫は言った。「セナパティ、まだ条件が一つ残っている。この剃刀でお前を切っても傷つかなかったら、進んでそなたのものになりましょう」。セナパティは切りつけられたが、刃こぼれができて自身は傷つかなかった。姫は素早く寝室に運ばれ、思いが遂げられた。姫はセナパティの妃にされた。姫の聖クリスはキヤイ・グピタ Gupita と名を改められた。

翌朝セナパティは配下の謁見のため外に出てきた。服従したブパティたちもみな拝謁に参上した。パティの国守はセナパティが妃を手に入れたと知って、とても不愉快だった。自国が敵に攻められるという口実を設けて、

帰国の許しを求めた。引き止められたが、振り切って出立してしまった。パティ国守が去ってしまうと、セナパティはマンダラカに告げた。「叔父上、まだお気づきでないかもしれませんが、わがパティの弟は背き、挑みかかるつもりでおります」。マンダラカ公はとても残念だった。ついでセナパティはパスルハンを征服するために軍を率いて出立した。妃のマディウンの姫は伴われていった。パスルハン国の境界に達すると、そこに本陣を張った。

さて、パスルハン国守はセナパティが攻めてきているとの報せを受けた。おおいに恐れてあっさり降伏することに決め、降伏の証として差し出す財宝の準備を整えた。ここに配下のズパティでカニテン Kaniten という名の者がいて、セナパティと一騎討ちをせんと申し出た。国守の許しをえて、家来数人を連れて出ていった。セナパティは戦いを挑む者があるとすでにわかっていた。全身濃い紺色の戦衣をまとい馬に乗って、同じく濃い藍色の戦衣をまとい槍で武装した40人を従えただけで本陣を出発した。道でカニテンと出会うと誰何された。セナパティは、自分はセナパティの家臣でヌンバック・チュムン Numbak-Cemeng 隊の隊長であり、キ・カニテンと対戦するために遣わされたと答えた。カニテンはこれを信じ、こうして騎馬で一騎討ちが始まった。従士たちは手出ししなかった。槍の戦いが長く続いた。セナパティはそこでカニテンとの戦いに勝てるようアラーに祈りの言葉を捧げた。そしてセナパティが槍を突き出すとカニテンの膝の皿に当たった。カニテンは傷つかなかったが、馬から落ちて足をけがして力が入らなくなった。カニテンは、鞍を置かない足の不自由な雌馬に乗せられ、太い紐を手綱として、40人の武者に付き添われてパスルハンの町に送られた。セナパティは本陣に戻った。パスルハン国守の前に連れられたカニテンは、マタラムのヌンバック・チュムンの隊長との戦いに敗れたことを報告した。国守は「お前の戦ったのがまさしくセナパティだと、お前は

まだわかっておらぬのか」と申された。カニテンは「対戦したのがセナパティとわかっていれば、おめおめ戻らず死を選んでおりましたものを」と答えた。これを聞いた国守は怒って、斧でカニテンの首を伐るよう命じた。斧で首を刎ねようとしたが、傷つかなかった。そこで溶かした錫を口に注ぎ込まれカニテンは死んだ。

国守はセナパティの40人の武者たちに褒美を与え、そして降伏の証としてあらゆる財宝を差し出し、パスルハンの国を譲り渡した。国守の使者は出発し、セナパティに会うと、伴ってきたものをすべて引き渡した。セナパティはおおいに喜んで言った。「使者よ、お前の主に伝えよ、わしは直ちにマタラムに帰る、そしてお前の主人の国を安堵すると。しかし東部のブパティたちに対する命令を受けた時には、これに従い、逆らってはならぬと」。こうしてセナパティとその全軍はマタラムに戻った。

42. クディリのセナパティが戦わずしてマタラムの偉人に降伏する

セナパティに敗れた者の多くはスラバヤに逃げており、マディウン侯の王子マス・チャロンタンもその一人だった。スラバヤのパングランに女婿として迎えられ、ついでジャバンのブパティに任じられた。ウィラサバにもランガ・プレマナ Premana という者がブパティとして派遣された。クディリではブパティはパングラン・マスといい、4人の兄弟がいた。最初はセナパティ・イン・クディリ Senapati-ing-Kedhiri〔クディリのセナパティ〕といい、二番目はサラ・ディパ Sara-Dipa、三番目はケントル・ジュジャング Kenthol Jejanggu、四番目はカルティ・マサ Karti-Masa といった。パングラン・マスの死後、スラバヤ公によって、ラトゥ・ジャル Jalu なる者がブパティに任命された。セナパティ・イン・クディリと兄弟たちは侮辱と感じて、マタラムのセナパティ侯に、降伏し臣従するつもりであるとの手紙をもたせて使者を送った。使者の名はナヤカルティ Naya-Karti

といった。手紙を受けとり、これを読んだセナパティ侯はおおいに喜んだ。そしてパンゲラン・ウィラ・ムンガラ Wira-Menggala に命じられた。「ウィラ・ムンガラよ、クディリへ行け、セナパティに会うのだ。トゥムンゲン・アラップ・アラップ Alap-Alap と徴税マントリたちを連れてゆけ、またパジャン、ドゥマック、ジャガラガ Jaga-Raga のブパティたちとその軍勢をお前に付ける。アラップ・アラップを副将とせよ。クディリの使者も連れてゆけ。セナパティ・イン・クディリが服従するのであれば、マタラムに連れてくるのだ。そしてアラップ・アラップ、ドゥマックのブパティとパジャンのブパティに命じて、さらに進んでラワを攻略させるのだ」。ウィラ・マンガラ公はじめ命令を受けた者たちはみな「かしこまりました」と答えて出発した。クディリに着くと、町の西にあるパクンチェン Pakuncen 村に宿営した。

一方クディリのブパティ、ラトゥ・ジャルはすでに軍を動員し布陣させた。夜になってセナパティ・イン・クディリとその兄弟は妻子一族を伴って、総勢200人ほどが脱走してマタラム側に合流しようとした。これに気づいたラトゥ・ジュールは皆殺しにせよと後を追わせた。クラカル Krakal で追いつかれ、戦いになった。ただちにマタラム勢が援軍にやってきた。激戦となったが、すぐに終わった。ラトゥ・ジュール軍は敗走し、砦の門を閉めた。マタラム勢は追跡しなかった。セナパティ・イン・クディリの女婿マス・ブリンビン Blimbing は負傷した。

ウィラ・ムンガラ公はセナパティ・イン・クディリを伴ってマタラムに戻るために出立し、ジャガラガに一時留まった。アラップ・アラップ公はラワへ進撃した。ラワは征服され、女たちは連れ去られ、財宝や家畜は奪われた。ついでアラップ・アラップ公はジャガラガに向かい、ウィラ・ムンガラ公に合流すると、ともにマタラムに帰った。戦利品と女たちがセナパティ侯に披露され、セナパティ・イン・クディリとその一族がセナパティ

侯に目通りした。セナパティ・イン・クディリと兄弟は館を与えられ美しい衣装を賜った。セナパティ・イン・クディリはセナパティ侯に長男として養子に迎えられ、おいに寵愛された。1500カルヤの采邑地を与えられ、兄弟たちも地位に応じて村の土地を与えられた。

ある時セナパティ侯は町をレンガ壁で囲もうとした。赤レンガと白レンガが用いられた。その仕事を監督したのはセナパティ・イン・クディリだった。まもなく二色の城壁が完成し、たいへん見事なものだった。1509年のことである。侯はセナパティ・イン・クディリにお尋ねになった。「この城壁に銃眼を設けなかったのはなぜか」。セナパティ・イン・クディリは「もし敵が来ましたら、拙者が町の外で対戦し、ここまで来させませぬ」とお答えした。侯は重ねて尋ねられた。「余は、マタラムはやがて東部の者共に破壊され、マタラム勢は大勢が戦死するという予言を聞いたことがある。お前もこうした予言を聞いたことがあるか」。セナパティ・イン・クディリは「拙者が存命の限り、そのようなことは起こりませぬ。拙者が東部勢を一掃して見せましようゆえに」とお答えした。セナパティ侯はとてもお悦びになった。

43. マタラムが東部ジャワ勢に攻められる

さて、東部ジャワのブパティたちはマタラムを征服しようとマディウンに集まった。ブパティたちの大將はディパティ・グンディン Gending とディパティ・プサギ Pesagi といった。全軍が二路に分かれて進発した。グンディン公が半分を指揮してラウ山の北を進み、プサギ公が残りの半分を率いてラウ山の南を進んだ。非常な大軍だった。

パヌンバハン・セナパティは間諜たちからすでに、東部の外領のブパティたちがマタラムを征服しようとしていて、2方向で進軍していると報告を受けていた。侯は軍を招集し、一族の者たちとマタラムのブパティたちが

勢揃いした。セナパティ・イン・クディリが、侯ご自身が出陣なさるまでもなく、自ら大将を務めたいと願い出て認められた。大軍がセナパティ・イン・クディリの指揮下に進發した。タジに着くと軍は二分され、バンゲラン・プルバヤが半分を率いて、北から来る敵に当たり、セナパティ・イン・クディリがもう半分を指揮して、ウトウル Uter 村に着陣している南の敵に当たることになった。両軍は同時に進發し、敵に対戦しともに激戦となった。東部軍の多くが死んだが、マタラム軍の死者はわずかだった。セナパティ・イン・クディリは、自身の叔父であるプサギ公と一騎討ちとなった。2人は仇敵どうしだったのだ。相討ちとなって2人とも死んだ。マタラムの一族はこれを聞くとただちに奮戦した。東部勢は多くの死者を出し一掃された。マタラム側は多数の捕虜を獲得し、セナパティ・イン・クディリの遺体と共に帰途につき、その死を伝える使者を先行させた。セナパティ侯の悲嘆はたいそう大きかった。セナパティ・イン・クディリの遺体をウェディ Wedi 村に葬るようお命じになった。マタラム軍は凱旋し、侯は全軍に報奨を与えられた。セナパティ・イン・クディリの弟スラ・ディバはブパティに昇進し、マルタラヤ Marta-Laya の名を与えられた。キ・ジュジャングはディパティ・スパンタ Supanta の名を与えられた。キ・カルティ・マサはサラ・ディパ Sara-Dipa の名を与えられた。キ・マス・サリはドゥマック国守に任じられた。その他の多くの者が昇進した。

44. パティ国守がマタラム侯に敵対する

さて、パティの国守はマタラムに背いて戦うつもりであった。一族の者たちが制止したがその甲斐がなかった。クンドゥン山地の北側のすべての村の土地を要求し、あわせて100本の槍先とその柄を求める使者がマタラムに派遣された。使者はマタラム侯に弟君からの要求を伝えた。侯はクンドゥン山地の北側の土地をすべて譲ったが、槍については槍先だけで柄は

与えなかった。使者が帰っていくと、侯はマンダラカ公に、パティ国守が背こうとしていると伝えた。マンダラカ公はおおいに嘆き悲しんだ。

パティの使者は国守に報告し、国守はこれを受けて、クンドウン山地の北側の村の人々を服従させるよう命じた。みな服従したがドゥマックだけは抵抗し、戦争になり要塞の中に閉じこもった。パティ国守のプラゴラ Pragola はこの時多数の兵を擁しており、マタラムに対する戦いに進発した。行軍中に略奪が繰り返され大混乱が起こった。パジャン国守は急ぎマタラムに使者を走らせ、パティ国守がマタラムを攻略しようとしていると通報した。マタラム侯はこのパジャンの報に接すると、王子のパンゲラン・ディパティ・アノム Anom に命じられた。「おい、マタラム全軍を率いてお前のパティの叔父に当たれ。しかし戦いを交えず、警告するだけにしておけ。それでもなお、自分を見失っているようなら、仕方がない。その場合はわしのこの槍を使え」。これに対してマンダラカ公は「お前は息子にだけ戦いに行かせるとは、どういう了見か。思うに、パティ国守に対戦できるほど強くない」と意見した。公の答えはこうだった。「叔父上、あなた様の孫だけ対戦に向かわせますのは、パティの我が弟にいつまでも私に腹を立てないように、よく思案させたいからです。私の息子と戦うのは気が進まないはずです」。マンダラカ公は何も言わなかった。こうしてアノム公は出陣し、プランバナンに滞陣した。

さて、パティの大軍はすでにクマロン Kemalon に至って宿営し、朝になって前進した。マタラムのアノム公も出陣したが、旗幟兵を伴うだけで、軍はプランバナンに留まらせた。まもなくパティ軍と出会った。パティ国守は、プリヤイが旗幟に従えただけで向かってくるのに驚いた。しばらくしてそれが自分の甥だと見分けがついた。国守はがっかりし、当惑した。すぐに騎馬のまま近づき「おい、お前の父はどこか、お前はここに何しにきた」と尋ねた。アノム公も騎馬のまま答えた。「あなたの兄上はまだ後

衛におわす。あなたに申し上げるよう遣わされました。ここマタラムにこられたのは何故か。ここマタラムの国を奪わんとのことならば、疾くお戻りなさるがよい。マタラムはパティとともに、詰まるところあなたご自身のものなのですから」。プラゴラは顔をそむけて「わしはお前の父の性格をよく知っている。いつも楽ばかりしたがる。すぐに戻ってお前の父にここにこさせよ。大人どうしの話をするのだ」と返事した。

アノム公は「あなたがお戻りになりたくないのであれば、また我が父上がああなたの兄弟であると思出したくないのであれば、あなたのお望みに従うよう命じられております」と応じた。国守はこれ聞いてたいそう腹を立てて言い返した。「お前の父はわしを見くびったものだ。お前がわしにかなうわけがない。わしが迫っておるのはお前の父じゃ。お前の父の力強さと無敵さに挑んでおるのじゃ。お前ごときが立ち向かえるはずがない。すぐに戻ってお前の父を呼ぶがよい」。この言葉を聞いたアノム公はいきり立ち、叔父に槍を突きつけた。国守は驚いて飛び上がったが、傷つくことなく「聞き分けのない餓鬼だ。はやく戻ってお前の父をここに来させよ」と呼びかけた。それでもアノム公は突きかかり続けた。国守は痛みを感じたが傷つかなかった。さっと槍を握ると、石突きを甥の胸に突き当てた。アノム公は馬から落ちて地面に突っ伏し、意識を失った。家来たちに担がれてブランバナンの本陣に運ばれ、マタラム侯に事態が報告された。パティ国守はドンケン川の近くに滞陣し続け、ココヤシの木で砦を造った。

王子が打ち倒されたという報せにセナパティ侯は強い衝撃を受け、パティ国守の姉である妃に言った。「そなたの弟はすっかり判断力がなくなってしまった。その証拠に自分を見失って、甥に槍を突きつけた」。妃は「そういうことであれば、悪いのは弟ですから、殺されてもとやかく申しませぬ」と答えた。

こうして侯は身支度し、準備が整うと騎兵部隊を率いて出発した。馬を

飛ばしてプランバナンの本営に着くとすでに夜だった。侯は立ち止まり隊列を整えた。軍勢が整うとリンシル・ダル lingsir dalu の刻〔午前3時頃〕になって出陣した。マンダラカ公も随陣した。パティ国守の要塞の近くまでくると、マタラム軍は関の声を上げ、銅鑼のキヤイ・ビチャックが鳴り、轟音が響きわたった。パティ軍は混乱し、右往左往した。侯は砦に入ろうとしたが、入り口がわからなかった。マンダラカ公は素早くクリス、キヤイ・チュリックを抜いて、一撃でココヤシの幹の壁を切断し、進路を指し示した。侯は騎馬のままさっと中に入り、軍勢が続き、猛攻を加えた。パティ軍は応戦できる者がなく、大勢が死んだ。パティ国守は残軍と共に砦から逃げ出した。ちょうどその時、ドウンケン川に鉄砲水がおこり、パティ軍の多くが水に吞まれてしまった。国守と家来たちはパティめざして戻っていった。侯とその軍は追跡した。パティの町に入った国守はただちに近隣のブパティたちに援軍を要請する使者を送った。ブパティたちは軍を率いてやって来て、パティに布陣した。侯とその軍勢も到着し戦闘が始まった。パティ勢は打ち負かされ大勢が死に、みな逃げ出し、洪水の川に溺れ、大勢が水死した。パティ国守の生死は不明だった。マタラム軍は町を略奪し女たちを連行した。侯はマタラムに帰陣された。パティ征服は1551年であった。

セナパティ侯は立派に王座を保っており、マタラム国はおおいに繁栄した。マンダラカ公はセナパティ侯に、まだ服従しない東部の諸国を征服するよう進言した。侯はこう答えられた。「叔父上、いまだその時ではありませぬ。やがて私の孫がジャワ全土の民を従え、並ぶ者なき王になるでしょう。私はその礎を造るのみです。さらに、将来、私に定めの時が訪れたなら、私を継いでマタラムの王になる者はわが子ジョランといたしましょう。若いですが子孫を残す者となりますので。我が子たちのなかにもし、私のこの指示に従わない者があれば、それらはみなアラーの怒りに触れるであ

りましょう。叔父上と我が弟マンクブミはともに、あなた様の孫を王に立ててくだされ」。マンダラカ侯は「心えてござる」と答えた。

45. セナパティが死に太子が継ぐ

セナパティが王位について3年たち、重い病にかかってそのまま死去した。モスクの南、父の墓の足許に葬られた。1552年のことであった。

月曜日にキ・ディパティ・マンダラカがパンゲラン・マンクブミとともにパンゲラン・ディパティ・アノムの手を引いてシティンギル〔謁見の間〕に登場した。アノム公は黄金の玉座に座らされ、マンダラカ公とマンクブミ公が左右に控えた。マンクブミ公は立ち上がって力強く宣言した。「マタラムのみなの方よ、証人たれ、パンゲラン・ディパティがここに父を継いでスルタンに即位する。もし承服できず従わざる者あらば、いまここで戦いに立つべし、わしが相手になる」。マタラム人たちはこぞって賛意を表した。つづいて近親者たち、ブパティたち、マントリたちが次々に新王に跪拝の礼を行った。こうして王様は内廷に戻られた。

若い王様のもとで王国はおおいに栄え続け、いつも公正な判決が下され、宗教は堅持された。ある時王様は軍隊に、クラトンの西のダナラヤ Dana-Laya に離宮を造るようお命じになった。ジュル・タマンという名のアルビノの道化の居場所になさろうというのであった。王様に化けて王宮内でしばしば問題を引き起こすからであった。妃や側室たちがしょっちゅう王様と間違ってしまうのであり、ジュル・タマンのこの振る舞いは止まなかった。こうしてマタラム軍は離宮を作ることになった。それは程なくできあがり、ジュル・タマンはそこに住まわされた。

王様は木曜日に謁見のため外にお出でになった。一族の者たちとマントリやブパティたちがみな揃ってご挨拶申し上げた。王様の兄君パンゲラン・ブグルだけが伺候しなかった。下座に座らねばならないのが恥ずかしかつ

たのである。自分の領土をもちたかったのだが、それを弟にお願いするのがいやだった。王様は兄君が拝謁にこないのをご覧になるとマンダラカ公にお尋ねになった。「お爺様、兄上のことであなた様はどのようなご意見でしょうか。愚考しますに、兄上はここマタラムに住み続けるのがとても嫌なようです。ドゥマックのブパティに致したいと思います」。マンダラカ公と近親者たちは王様のお考えに賛同した。マタラム国の楯にもなるだろう。こうして王様は兄君をお呼びになった。プグル公はすぐにやってきた。そして弟と並んで座った。王様は申された。「兄上、あなたをドゥマックのブパティに任じます。そこで良い生活を楽しみ、マタラム国の楯となって下さい」。プグル公は感謝の言葉を申し上げ、王様は内廷にお戻りになった。翌朝プグル公は妻子を伴ってドゥマックへと出立した。ドゥマックの人々はみな服従し、プグル公は良い生活をおおいに享受した。

46. ドゥマック国守がマタラムに背く

パンゲラン・プグルはやがて弟である王様への服従をおろそかにし、背いて遺産である王位の奪取を願うようになった。配下のブパティ、ディパティ・グンディンから、自分が長男だから父を継いで即位する権利があると煽られたのだった。プグル公はこの言葉に従い、軍に命令してクンドゥン山地の北側の土地をすべて支配した。その地域の人々はみなこれに服従した。プグル公の軍はとても大きくなった。マタラム国を征服するため毎日軍の訓練に励んだ。頼りにしたのはディパティ・グンディンとディパティ・パンジュル Panjer であった。準備が整うと出陣した。並外れた大軍であり、プグル公自ら指揮をとった。道中ずっと略奪を行い、人々を捕虜とした。

パジャン国守はこの報告を聞くとただちにマタラムに知らせにきた。王はちょうど謁見中であった。パジャン国守は、ドゥマックの兄上が反乱を

起こしてマタラムに攻めてきていて、すでにタンバック・ウウォス Tambak-Uwos 村に滞陣していると報告した。王様はこれを聞いて驚愕された。出撃準備をお命じになり、自ら出陣しようとされた。命じられた者たちは「畏まりました」と答えた。そして王様は2人の弟の名前を引き上げられた。ラデン・トゥンバガ Tembaga はパンゲラン・プグルの名を、ラデン・カダウンはパンゲラン・ドゥマン・タンパ・ナンキル Tanpa-Nangkil の名を与えられた。王様は内廷にお戻りになった。

すべてが整うと、王様は全軍を率いて出陣された。軍はタンバック・ウウォスに達し、ドゥマック勢と対峙した。翌朝激戦が始まった。ドゥマック軍は圧倒されて大勢が死んだ。グンディン公とパンジュル公も死んだ。ドゥマックのプグル公は戦いの最中に捕えられ、縛られて輿に乗せられた。ドゥマック軍の生き残りは雲散霧消した。マタラム軍は王様に兄君を捕らえたことを報告した。王様は兄と妻子をクドゥスに住まわせ、従者は付けないうお命じになった。命令を受け取った者たちは「畏まりました」とお答えし、プグル公はクドゥスに送られ、たいそう哀れであった。

王様はマタラムにお戻りになると、軍隊に褒美をお与えになり、槍隊の隊長キ・ガダ・ムスタカ Gada-Mestaka を昇進させてドゥマックのブパティに任命し、トゥムングン・エンドラ・ナタ Endra-Nata の名をお与えになった。王様の弟君パンゲラン・ジャヤラガはパナラガのブパティに任命され、4人のブパティの上に立つことになった。ジャヤラガ公はそこでよい生活を享受した。配下の4人のブパティはパンゲラン・ランガ Rangga, パンジ・ウィラブミ Wira-Bumi, マラン・スミラン Malang-Sumirang, そしてナヤヒタ Naya-Hita といった。

47. パナラガ国守に任じられたジャヤラガ公がマタラムに叛く

ジャヤラガ公はやがて贅沢によって眼が見えなくなり、マタラムの王位

を奪取して王位に即こうと考えるようになった。4人のブパティは思い止まらせようとしたが無駄だった。そこで4人は相談してマタラムに報告することにし、出立した。ジャヤラガ公の家来の隊長たちは、4人のブパティがみなマタラムに行ってしまったことに気づくと、恐怖にとりつかれ、慌てて後を追ってマタラムへ向かった。マタラムに着くと、王様はちょうど謁見中だった。ランガ公とその同僚たちはアルンアルンのワリングン樹の南側で陽差しの下に座った。王様はこれを見て驚かれ、すぐにお調べになった。ランガ公たちはありのままに、王様の弟君が背いたことをお伝えした。

これを聞いてお怒りになった王様は、弟のパンゲラン・プリングアラヤにお命じになった。「弟よ、マルタラヤとともにバナラガに行け。お前の兄ジャヤラガをバナラガから放逐し、妻子と共にマスジッド・ワトゥ Masjid-Watu へ連れて行け。全財産を没収せよ。もし抵抗する家来がいたら殺してしまえ。そしてランガとその仲間をバナラガに戻らせよ」。プリングアラヤ公とマルタラヤ公は「御意のままに」と答え、軍を率いて出立し、ランガ公たちも付いて行った。バナラガに着くとジャヤラガ公と会った。ジャヤラガ公は王命が伝えられると、「御意のままに」と答え、そして間違いに気づき深く謝罪した。準備が整うとマスジッド・ワトゥに連れられていった。他方プリングアラヤ公とその部隊も戦利品を携えてすぐにマタラムに戻っていった。ランガ公とその同僚たちもともにマタラムに戻った。マタラムに着くと、王様の弟君はすでにマスジッド・ワトゥに放逐され、従者は付けられず妻子を伴うだけであること、全財産を持ち帰ったことを王様に報告した。王様はおおいにお喜びになり、ランガ公に指示された。「ランガよ、同僚とともにバナラガに戻れ。バナラガ地域をよく整えよ」

48. クラブヤックが死に、マルタプラ公が継ぎ、
ランサン公に譲位

パンゲラン・ランガは大いなる感謝を申し上げ、パナラガに戻っていった。そして王様は一族の者やブパティたちに申された。「我が子なるみな
の者、我が一族の者は言うに及ばず、汝らみな、こぞって忠実なれとは亡
き父王陛下のご命令とよく心えよ。服従せざる者は必ずや安寧をえられず。
今すでにその証拠がある。我が兄弟のブグルとジャヤラガである。ともに
惨めなことである」。こうして王様は内廷に戻られた。

その時王様にはすでに5人の子がおありだった。長子はマス・ランサン
Rangsang といい、2番目は姫でラトゥ・パンダン Pandhan といい、3番
目はデン・マス・パムナン Pamenang で、4番目はデン・マス・マルタ
プラ Marta-Pura で、心を病んでいたが、錯乱は時たま起こるだけだった。
末子はデン・マス・チャクラ Cakra といった。パンゲラン・マンクブミ
もすでに2人の子があり、長子はすでにブパティになっていて、ディパティ・
ソカワティ Sok-Awati といい、弟はバグス・ペタック Petak といい、マ
ディウンのブパティであった。

パンゲラン・シンガサリの子は1人で、パンゲラン・ブリタルといった。
パンゲラン・プリングアラヤにはたくさん子があったが、ここではラデン・
ブラウィラタルナ Prawira-Taruna とディパティ・マルタサナ Marta-Sana
の2人をあげるにとどめよう。アディパティ・マンダラカには4人の子が
あり、長子はパンゲラン・マンドウラ Mandura といい、2番目はディパ
ティ・ウィラプラバ Wira-Praba、3番目はパヌンバハン・ジュルキティン
Juru-Kithing といい、末子は娘でバタンのディパティと結婚していた。マ
ンドウラ公にはすでに2人の子があり、パンゲラン・マンドウラ・ルジャ
Mandura-Reja とパンゲラン・ウパサンタ Upa-Santa といった。

さて、陛下はすでに12年王位にあられた。ちょうどクラブヤックに滞在中に重病になられ、子どもたちと親族がその前にかしこまっていた。王様は祖父マンダラカ公と兄プルバヤ公に申された。「お爺様、兄上、余がはかなくなった後は、あなたの孫デン・マス・ランサンに余の王位を継がせましょう。王の威信は高まり、余を凌ぐでしょう。ジャワの国の人々はすべて服従するでしょう。ところが、余はかつてマルタブラが余を継いで王になると誓いを立てたことがありますので、余の誓いが満たされるよう、一瞬だけ王位に即けてくだされ。しかし直ちにランサンに譲位させるのです」。続いて王様は子どもたちと親族に申された。「余の血縁のみな者よ、みな互いに親しみ和するのじゃ。悪事にまず手を着けたものには安寧がなきことを。さらば、後は良きように」

王様は死去され、悲しみの声が響きわたった。遺体は清められ、モスクの西側に、父と祖父の墓の足許に葬られた。これは1565年のことである。

その後マルタブラ公はマンダラカ公とプルバヤ公によって王位を宣せられた。月曜日に外に出て拝謁をお受けになるよう王様に伝えられた。マルタブラ王は謁見にお出ましになり、黄金の玉座にお座りになった。マンダラカ公とプルバヤ公が挟むように左右に座した。マンダラカ公は王様に、亡き父上の遺言に従って座を降り、ランサン殿に王座をお譲りなさるようにとささやいた。マルタブラ公はただちに座を降り、兄ランサンに玉座に座すようお求めになった。プルバヤ公が大声で言った。「さあ、マタラム人、みな者、みな証人たるべし、デン・マス・ランサン殿が父上を継いで王位に就かれる、スルタン・アグン Sultan Agung 陛下、セナパティ・イン・アラガ・ガブドゥル・ラフマン Senapati-ing-Alaga-Ngabdu'r-Rahman の名の下に。これを尊重しない、あるいは同意しない者は、今その考えを明かすべし、わしが相手じゃ」。マタラム勢はみな声を揃えて賛同した。こうして新王は内廷にお戻りになった。

さて、この王様の即位によってマタラム王国はことのほか繁栄し、そして大王は公正にして寛大であり、父王を凌ぐと広く知られるようになった。家来たちは王を畏敬した。スルタン・アグン陛下、賢者王ニャクラクスマ Nyakra-Kusuma と呼ばれ、たいへん霊力があると知れ渡った。金曜日にはいつもメッカ Mekah にむけて礼拝をなされた。

マンダラカ公はというと、長生きしたので3人の王に仕えたのだが、やがて亡くなるとマタラムに葬られた。パンゲラン・マンドゥラとパンゲラン・ウィラプラバの2人の息子も死去し、ガンビラン Gambiran に葬られた。キ・ジュルキティンだけまだ存命だが、すでに高齢であった。

訳注

- 1) これら地名の位置は地図参照。ただしスムヌップはマドゥラ島東部なので地図に含まれない。またプリンガバヤ、プラグナン、パカチャンガンの位置は不明。なお、パカチャンガンがカチャンガン Kacangan のことならば、クルタサナとマディウンの間（正確にはガンジュック Nganjuk の南西8キロ）に位置する。